



©2005 石塚真一小学館

島崎三歩の山岳通信 特別連載 Vol.10

信州 山のプロフェッショナル

長野県の山岳地域で発生した遭難事例を原則 1 週間ごとにお伝えしている「島崎三歩の山岳通信」。その特別連載として、季節ごとに発行する「山岳情報」に登場！

信州の山で多方面に活躍する“プロフェッショナル”の方々の声を、皆様にお届けします！（聞き手：編集部）

Vol.10 “山のリスク対策”のプロフェッショナル

長野県山岳遭難防止対策協会

山岳遭難防止アドバイザー 羽根田治さん

<プロフィール>

1961 年、埼玉県生まれ。栃木県那須塩原市在住。フリーランスライター。山岳遭難や登山技術に関する記事を山岳雑誌や書籍などで発表する一方、沖縄、自然、人物などをテーマに執筆活動を続ける。『ドキュメント道迷い遭難』『生還 山岳遭難からの救出』『空飛ぶ山岳救助隊』『山の遭難 あなたの山登りは大丈夫か』『生死を分ける、山の遭難回避術』『人を襲うクマ』『十重大事故から読み解く 山岳遭難の傷痕』など著書多数。長野県山岳遭難防止アドバイザーとして講演活動も行なう。



「危険」が最も危険なのは、その危険を察知できないことにある」

一山岳遭難の事例を取材・分析されていますが、この頃の傾向をどう見えていますか。また、特筆する事例は何ですか。

羽根田 中高年登山者による遭難事故が多いのは相変わらずで、最近とはとくに 70 歳以上の高齢者の事故が多発する傾向にあります。個々の事例の詳細についてはわかりませんが、報道を見るかぎり、体力不足や単純な判断ミスが要因になっているように感じます。加齢とともに運動能力や判断能力が低下するのは仕方のないことです。そのことを自覚して、これまでの経験を過信せずに、技術的にも体力的にも余力を持てる山を選んで楽しんでもらいたと思います。

最近の事例のなかでは、登山中に仲間や家族と離れ離れになってしまい、それが遭難につながるというパターンが目立っています。最悪、はぐれてしまった者が命を落としたり、行方不明になってしまったりするケースも起きているので、パーティを組んで登る以上、メンバー同士は常に目の届く範囲内で行動するのが鉄則です。

一遭難要因の一つに道迷いがありますが、普及している地図アプリの上手な使い方を教えてください。

羽根田 ダウンロードしていきなり山で使うのではなく、事前に街などで使ってみて、基本的な操作法に慣れておく必要があります。これまで取材した遭難事例のなかには、地図アプリを入れたスマートフォンを持っているのに、地図をキャッシュ（ダウンロード）していなかったために役に立たなかったという人もいました。



また、道迷いを防ぐためには、地図アプリでこまめに現在地を確認しながら行動することが大事です。地図アプリの表示範囲は小さな液晶画面の制約を受けるので、広い範囲を俯瞰できる紙の地図と併用することをお勧めします。なお、山ではスマートフォンを機内モードにしておくとバッテリーが長持ちします。ただし、低温下ではすぐにスマホの電源が落ちてしまうので、冬山のナビゲーションツールとしては紙の地図やハンディ GPS のほうが適しています。

一 遭難リスクの高い単独行。リスクを抑えるお勧めの単独行のあるべき姿をアドバイスください。

羽根田 単独行では頼りになるのは自分だけで、万一アクシデントに遭遇したとしても、誰も助けてくれません。道に迷おうが、転滑落して重傷を負おうが、自分ひとりで対処しなければならぬわけですから、よりシビアなリスクマネジメントが求められてきます。そのことをよく理解し、最低限、次に挙げることを実行してもらいたいと思います。

- ・無理のない登山計画書を作成し、登山届けを提出する
- ・登山計画書は家族にも残し、下山リミットの日時も決めておく
- ・万一に備えた装備（防寒具、ツェルト、ファーストエイドキット、ホイッスルなど）を携行する
- ・山行中には山小屋に立ち寄り、ほかの登山者と会話する、山頂で撮った写真を家族に送信する、現在地を友人に知らせるなど、なるべく痕跡を残すようにする
- ・山岳保険には必ず加入しておく

「単独行のリスク回避の一つとして山行の痕跡を残す」（羽根田）

一 気象条件要因以外に、なぜ山岳遭難は減らないのでしょうか。

羽根田 遭難事故の発生には、気象的要因や地形的要因のほかにも人的要因が関わっています。その人的要因のなかでも大きな割合を占めるのが、不注意、油断、焦り、過信などの心理的要因です。また、人間が無意識的に潜在させている思考の偏りや歪み、すなわち認知バイアスもそのひとつです。こうした心理状態はリスクに対するウィークポイントとなり、ヒューマンエラーを引き起こされて遭難事故が発生します。人間はミスをする生き物なので、どんなに気をつけていても、ヒューマンエラーを 100%防ぐことはできません。それが、山岳遭難が減らないいちばんの原因ではないでしょうか。



一 登山者が安全に山を楽しむために、ぜひアドバイスをお願いします。

羽根田 クライミングインストラクター＆ガイドの菊地敏之さんは、著書『最新クライミング技術』（東京新聞出版局）のなかで次のように述べています。

結局のところ、「危険」が最も危険なのは、その危険を察知できないことにある。問題なのは、なにが危険なのかわからない、危険をシミュレーションできない、危険なことを危険なことだと考えられない、ということなのだ。

山に登る人は、この言葉を胸に刻んでいただきたいと思います。

一 長年にわたって山岳遭難や登山技術に関する執筆活動をしている羽根田さんのリスク対策の想いをお聞きました。無事下山することも登山者の責務。自らを守るための知識と技術を身につけて信州の山を安全に楽しみましょう！